



2
死の慰籍

新段十七行

6 或る若き婦人の葬式に臨み其親戚朋友人と慰心の
んて語りし所

み甚く喜ぶる

内村鑑三

6
歎き悲む聲耳に聞ゆ、ラケル其兒子を
歎き其兒子の無きによりて慰を得ず。馬太

傳二章十八節。

①

凡て父の我に賜りし者は我れ一とも先はず我れ末日
に之を懸らすべし。恚くは是れ我を遣し

別行

父の聖王意あり。約翰傳六章三十九節。凡て子を見こ之を信する者は永生を得我れ
末日に之を懸らすべし。全四十四節。

我を遣し父もし引かむされば人よく我に就る
よし我に就りし人は我れ末日に之を懸らすべし。

全四十四節。

イエス曰いはらば……我肉と食ひ我血を飲
む者は永生あり我れ末日に之を懸らすべし。
全五十四節。

聖書の研究

漢字七十行

死の何たる乎は之を他人の死、又は人類の死、又は生物の死として見ては判らぬ、一死は生命の終息である。新陳代謝の法則であると云つて死の何たる乎は判らぬ、學者として見たる死は興味多き問題である、詩人として見たる死に美的なる所がある。

死は普通の事であるから人は死に接して驚愕か否か、彼等は政治、殖産、藝術と云つて種々の事、おもしろいと思ふ、死に就く別に深き考へ、亦、彼等は大概は死は無き者のやうに思つて其日々の生涯を送る。

②

然し乍ら、他人の事としての死、人生の大事としての死に就ては平然たるものが出来るが、死が自分の事として見たる時は何人も驚愕する。死は遠方より之を望むと、面前之に

接するに由る、其間に大なる相違がある、遠く
 より望みたる死は左程に恐るべき事とはふい、
 然し乍ら死が我身と語るときに、彼は確かに
 に「恐怖の王」である、死が我最愛の者と奪
 去る時に、我等は彼の冥冥に如何ある者であ
 る事を知るのである、我等は其時哲學者の
 死の説明を聞くも何の慰めたりき所かあること
 なる、詩歌も美術も死の悲痛を減する上に
 於て何の効力も無いのである、「ラケル其の兒子を
 歎き、其兒子の無きが故に慰を得ず」とあ
 る、兒子を失ひし父母の歎き、妻を失ひし
 良人の歎き、是れ慰を得ざる非心歎である、
 宇宙廣しと雖も此場合に於ける死を慰の
 得る物とは一つも之を看出すことが出来
 ないものである

小説の研究

何時か何處か相見ん

復治の希望ツツクあくして、きだい而會日の期待ふくして
一死は慰なぐさを得ざる5苦痛である。

復治の所望しようはあるとして、復治は確かに有る事
である乎、其事を知らざるが故に死の刺はりは抜とれぬ
のである、世に死者を復治するの術は無ないのである、
人は死して復た還かへらぬ、歎なげくも嘆なげくも詮せん方かたある
である、復治は僅かに人類の甚おむとしてのみ存するに
して、其、實際に無き事であるが故に、人は一死に
遭遇あひまして慰なぐさも得えないのである、茲に於てか一死を
慰なぐさむるの術つととして唯ただ諦あきらめの一ひと事があるのみである、
致しかた方かたあるに、止得えぬを得えない、何人にも來る事とて
あると、憐あはれむべき人類は其文明進歩を
誇り、其科擧こけうと執とる術つとを誇り、其天然の
征服と誇るにか関かんはらず、死に對しては此理由

本書の研究

あき、絶望的の諦たのまがあるのみである。

然し乍ら復治は果して無い事である乎、受ける者の死に遭遇して何人の心にも自然と起る此所望よそがに應ずるの事實は無いのである乎、而してキリストの福音は人類自然の此要求に應じて問題の解決を提供するのである、曰く

復治はあり、イエスキリストに於て此事は行はれた、而して彼を以て凡そ彼を信する者の上は此事實は行はれるであろう、復治の希望は決して痴者の臆裡に浮ぶ一時の夢では無い、確実ある事實である、

6

と、聖書の辞を以て謂ふならば、キリスト死を廢し、福音を以て生命と壇壇ざらる事(復活)を著明あきらかににせり

とある(提摩太後書一章十節)、キリス

トに由て死と歎く人類自然の要求は完全
に之れたされたのである。

然れども人は更に問ふと言ふ。復治は
如何にして行はるべき乎、如何なる能力、如何なる方
法に由て行はるべき乎と、而して此問に答へてイエス
は曰ひ給ふたのである

我れ末日に之と甦らざべし

7

と、彼は一時に四たび繰返して此言を發せ
られたのである。我れ……末日に……甦らざべしと

何れも重い言辭である、復活の事實はイエスの
此言を一々精査して見ると能く判明するのである。

我れ……能力の充實せるイエスキリスト、天の中、
地の上のすべての権力を賜はれりと言ひ給ひし彼
れ、世に在りし間に死者を甦らすの實驗
と有ら給ひし彼れ、其他種々の~~種々の~~
不思議ある行を爲し給ひし彼れ、又人類

聖書の研究

25

を向上せしむるに於て歴史に最大の力が
れし彼れ、又我等彼を信する者の心霊に
在りし何人、何物、爲す能はざる道
德的變化を成就せし彼れ、神の
子、人類の王、我等の救者たる彼れ
主イエスキリストは死者を甦らし給ふと
の告ごである、死者を甦らすの薬草がある
云々の言はふ、其秘術が^{発見された}と云ふ言はふ、
又ペテロとか、パウロとか、ヨハネとか云ふ人か比喩
蹟を行ふと云ふ言はふ、我は生命あり
復治ありと云ひ給ひし神の子イエスキリスト
が^事此^事を爲し給ふと云ふ言はふ、何れも不
思議はふのである、パウロはアグリッパ王に問ふ
て曰ふた、其侍臣等

聖書の研究

神、死し者をよみがえ甦よみがえらせ給たまつりと云ふとも汝
等何ぞ信まことい難むづかしいしとすらや

と(行傳廿六章八節)生命の源みなもとふる神が

其子を以て死者を甦よみがえらし給ふと云ふのである。

是れ信まことい難むづかしいい事ことではある、馬太傳あり、路加傳

あり、四福音の何れいづれありを讀よんでイエスの何

者ものある事ことを知しることならば、彼が死者を甦よみがえらすと聞

いて別べつに怪あやましむるのである、イエスの能力ちからと柔なく知して

謙遜けんそんと無私むしとを以てして、死者の甦よみがえは不可能

ではある、イエスを知しらずして甦よみがえは判わからぬ、然しかれども

イエスを識しりて甦よみがえの大奇蹟たいきせきも出來得ある事こととし

て受納うけいれらるゝに至いたるのである。

9

甦よみがえすはし……甦よみがえすとは何なにである乎、よみがえりしは

黄泉よみより還かへる事こととある、即ち死者の原かもとの肉

體を以て復活する事とある。然し乍ら、**聖書**
に謂ふ所の**甦**は單に肉體の復活
を謂ふに止まるる。 Anastasis は「起上る」の意である。

一たい死し者の**更生**に止まるるは、**原**より**死**し者

の**新生**をも謂ふ。而してイエスキリストに由るよみかたり

は**更生**に**新生**を加へたる者である。我等は

死しと由たが**原**の**體**を以て**甦**はるゝに止まるるは、

其上に更に新らしき生命を加へらるゝのである。

復活は生命の**進化**である。其**新**發展である。

人はキリストの復活する所とありて始めて**眞**の

生命に入るのである。我等**今**有つ所の**體**は

是れパウロの所謂「**死**の**體**」である（**羅馬書**

七章廿四節）。**榮光**ある復活**體**に較べ

見れば**死**の**體**同**朽**の者である。神がキリストを

以て**末日**に**信**者**賜**ふ**體**は**朽**る**肉**の**體**では

壞る者にて播まかル 壞こざる者にて 甦よみがるん、尊
からざる者にて播まかル、榮木さかある者にて播まかル 甦よみがる
され、弱よき者にて播まかル 強つよき者にて 甦よみがる

とあるは此事別行である(哥林多前書十五章一)

四二、四三(即) 甦よみがるは新あらに造つくらるる事ことで

ある、文字は以もて事こと實まことと表あら現あらすに足たりふい

我等は甦よみがるんと聞きこ此こ朽くる肉體にくたいを以もて

甦よみがる地上ちのうへに現あらはるんと思おもふんはあらあい。

末日しゆらいのみに... 何故なにゆゑに末日しゆらいのみに甦よみがるんでああつつ、今いま

茲こゝ處こゝに甦よみがるんといいふんであるん、イエスに若もし死しも

復またたたい活いかす得えるんの能力ちからがあるんは、何故なにゆゑに

末日しゆらいのみまで待まちたたして、今いま、茲こゝ處こゝに活いかすたらかあらあい

來きたらいふのであるん、彼は彼の友ともウザウザと其その姉妹あがま

友人ともの面おもて前にまへにまりて甦よみがるんしたと書かいてあるんは

ふい^と主(約翰傳十一章) 是れ^安なる然起
るべき疑問である、而して愛する者の死に遭
遇して我等は此疑問の我等の胸中に湧出す
るを禁おし得ふつのである。

12

然し其れは深き理由があるのである、末日と云
ふは早に^{たつ}遠^くを未来に於てしと云ふ事とは是れ
末日とは此世が完全の域に達した時を云ふ
のである、新しくしき天と新しくしき地との現はるゝあり
て復た死あらず哀み^{あは}哭き^{なげ}痛^{いた}み有る事と云ふこと
云ふ其の樂しき美はしき状態に達した時
を云ふのである、神がキリストを以て自己を愛す
る者と末日に^{よかり}甦^{よみが}りし給ふと云ふは、天地の
此準備が成りし其の時に此事を行ひ給ふ
と云ふのである、死あり哀み^{あは}哭き^{なげ}痛^{いた}み有る此
世に今甦りたればとて死者は固にい人生のすべ

聖書の研究

の苦痛と繰返あぢは返かへとねはふらぬあぢはのである。既に
 一回之と寄あぢはい者が何ぞ雨あぢはい之と繰返す
 の必要あらんや、死はあぢは一たい之と寄あぢはへば充分
 である。何を擇えらうんぞ、
 である。まゝ雨あぢはいま雨あぢはい此世に還り来り
 雨あぢはい涙の谷と山やまり、雨あぢはたい死の河と渡る
 べけんや、今茲いま處ちに死しと甦よみがすは無な慈悲
 之より大なるはあ、死者しとして静かに眠いらしめ
 よ、彼が雨あぢはい還かへり時ときの國くに見み
 ん時は此世に死と涙と其跡あとと絶たし時とき非ひ
あぢはらしめよ、復かへ治ちは末すえ日に於おて行いはるるにあらざれ
あぢは恩おん恵けいはあへ、而して愛あいある神かみは今いま茲ち處ちに
 死者しを甦よみがらし給たまひて彼かとして雨あぢはい死しの苦くるしみき杯さかづき
 を飲のましめ給たまふが如ごとき無な慈悲あぢはを施たまひ給たまひて
 はあつのである。彼は死者は之と末すえ日に甦よみがらし給たまひて
あぢは其その大おほなる慈あつ心こころ愛あいを現あらはし給たまふのである。内うち心こころ

聖書の研究

31

この通ふ外界があつてちと生命は最大のを

福であらうのである、イエスに在りて義とせらるる聖者の

れ贖はれたる霊が聖き壞らるる體を以て

改造されたる天地に雨に生れ來りてちと果

の幸福は果たらうのである。

神の子

14

我れ末日に之に懸らさんと、主イエスキリスト、

聖城ある新らしきエルサレムが備救正し神の

所を出て天より降り、復た死あらず哀の突

き痛無きに至る時、彼を信い彼に依頼し

者に新生命を注ぎ、彼とし死より起上りしもの

榮より壞らるる體を以て永久に存在ししの終

ふと、此確なる約束の我等に供せらるる死に接し

て我等取て恐れ脱し、神に接し

聖書の確證

32

感得するものである。

